

「アイデンティティに先行する理性」

アマルティア・セン(著)

細見和志(訳)

関西学院大学出版会 2003年3月31日刊

先進的な経済学者は、合理的な経済人という概念に疑念を持って、それを補完するような人間像を探求してきている。カリフォルニア大学のアカロフ教授やケンブリッジ大学のセン教授がその急先鋒にいることは衆目の一致するところである。目下、彼らが注目している概念はアイデンティティ（同一性）であり、あるグループに自らを同一化することが経済学的にどのような意味合いをもつかという問題である。

同一化の概念は、その結果として、あるグループの人を差別することになるかもしれない、しかし自己を同一化するということは、自らの積極的な選択を意味し、それが自らの厚生を決定するという側面もある。この問題の本質的な意味を平易に解説したのが本書であり、哲学的な議論ではあるが、現代社会に非常に広く影響を及ぼす問題であるのでここで紹介しておきたい。

セン教授は「われわれが倫理や規範、さらには知識や理解力を身につけていく時に、われわれが同一化し、付き合いを持つ共同体や人々は、大きな影響力を持っている。この意味で、社会的アイデンティティは、まさに人間生活の中心にある」(p.8)と指摘しつつ、アイデンティティとは共同体に内在する伝統を受動的に受け入れるものではなく、実質的に選択すべきものであることを強調している。すなわち、選択の可能性を否定することは、「われわれがどのように考え、自分を何と同一化すべきなのかをじっくりと考えて判断するという責任を放棄することになる」からである。ここから「アイデンティティにおける多元性、選択、合理的判断を否定することは、暴力や野蛮のみならず今も昔も変わらない抑圧を生み出す原因となる可能性がある」(p.33)という指摘に結びついている。

翻って、わが国の経済が低迷している理由として、国民がアイデンティティを選択できずに立往生しているという説明も成り立つのではないだろうか。明治維新や第二次世界大戦終戦直後には、それまでに日本人が自らを規定してきたアイデンティティを完全に放棄し、新しいアイデンティティを創造し選択し、社会経済の建設を行ったと解釈することができるだろう。現在は、サラリーマンが企業戦士としてのアイデンティティに矛盾を感じ、自らの属する企業の内部告発を行うなどの動きが出ている一方、自らをどこにも所属しないと感ずるアイデンティティを喪失した世代も出てきている。

セン教授は国籍や市民権を超えた関係、例えば、医師や弁護士としての職業的アイデンティティから生まれる国境なき責務、核実験に反対する国境を越えた市民の連帯などの事例を挙げ、今後は、各アイデンティティ間の優先順位に

関する、各個人の合理的な判断が必要とされるし、その選択の余地を設けておかなければならないということを指摘している。

わが国の国民の選択するアイデンティティが複合的なものであっても全く構わないが、自らが積極的に選択したくなるようなアイデンティティを創造することが急務なのではないだろうか。